

人間総合研究センター主催 「人間科学研究交流会—Current Topics in Human Sciences—」記録

第
60
回

話題提供者：橋爪 太作

演 題：木々が倒れるとき：メラネシア社会・文化人類学における植物のメタファーを
現代ソロモン諸島の森林伐採現場から検討する

開催日時：2022年4月13日, 17:00～17:45

開催方法：Zoomによるオンライン開催

本発表では、発表者自身が2017年から2020年にかけて南太平洋メラネシア地域、ソロモン諸島マライタ島北部で行った文化人類学的調査に基づき、その理論的考察を行った。

テーマとなるのは、南太平洋メラネシア地域の社会・文化人類学における植物・熱帯生態系の問題である。先行研究では、メラネシアの人々が親族関係や人格などの社会的なものを構築するやり方において、イモ類栽培を中心とした熱帯生態系における生業活動がある種のメタファーとして働いていることが指摘されてきた。たとえばクランの土地から夫の土地へと婚入した女性は、イモと同じように夫のクランの土地に「植えられ」る。また生まれた子供の血のつながりも、生物学的な生殖による自然的な継承ではなく、父方の土地で育ったイモを食べ子供の身体が成長するという、特定の社会性を帯びた物質のやりとりにより後天的に形成される。では、このような自然と文化が互いに入れ子になった伝統的メラネシア社会の論理は、現代の森林伐採事業のような大規模な生態系への介入において、どのように変形され、新たな側面を露わにしているのか。

だがこの疑問を解き明かす前に、まずは我々には「社会的」と見える親族関係と、「自然的」と見える植物や身体の成長が現地の語りでは混淆している点について考察する必要がある。これは人類学において自然と文化の関係性の問題として語られてきた。たとえばC・レヴィ＝ストロースは親族と神話という人間社会を構成する2つの大きな領域を、人間の「自然から文化への移行」を可能にする媒介として捉えた。

こうした自然と文化の関係のうち、我々にとって馴染んだものの1つが(人間の)親族と樹木の重ね合わせである。樹木は最初の全体があらゆる部分へと分有されるという、西欧形而上学の根幹をなす〈全体-部分〉関係のイメージである。非ヨーロッパ世界を扱う人類学も、こうした樹木的な親族のあり方を無自覚に前提としていた。非ヨーロッパ世界では生物学的な事実と反するようなローカルな親族

観念がたびたび発見されたが、それらは「本当の親族＝生物学的事実」に対する「想像的な親族＝現地の文化的解釈」という「自然／文化」図式の中に位置づけられてきた。

メラネシア地域は大半が熱帯性気候であり、イモ類が主要な作物となっている。麦や稲などの温帯の主要作物と異なり、イモは地下の根茎で広がり、中心を持たない。こうしたイモ類の特性は、現地の人々にとって自らの文化・社会を概念化する媒体としても重要であることが指摘されてきた。

G・ベイトソンはニューギニアでの調査から「〔現地の人々にとって〕コミュニティが閉じたものであるという観念は、それが「蓮の根茎のように」(like the rhizome of a lotus) 常に自らを分割し子孫を広げるものであるという考えとはおそらく適合しない」と述べている。ここで彼が主張しているのは、幹を切り倒してしまえば枝葉も枯れてしまう樹木とは異なり、イモを掘り出したあとに切り取った葉や蔓を植えるとまたイモが育つように、根茎とはあらゆる部分が全体であるような世界であるということだ。

そしてベイトソンを継いだ人類学者たちは、メラネシア人たちの社会的実践に内在する論理を元に、西欧的な「自然／文化」図式によらない親族論を立ち上げてきた。これはつまり、親族(社会・文化的なもの)の再生産と土地(自然的なもの)の生産力が相互に絡み合いながら、後者によって前者が根底的に可能にされるような、自然と文化が水平に入り混じる世界としてメラネシアを描き出すということに他ならない。

ただし、これらの研究では「実のところ、あらゆる成長の力とはこの熱帯林環境が生命に満ちているということに他ならない」というJ・リーチの言葉に象徴されるように、文化と自然が混淆しつつ達成される「成長」がメラネシア人にとっての自然や土地のあり方として本質化されている。

この「成長する自然」ははたして現実のメラネシアの自然に照らして妥当だろうかというのが、発表者自身の問い

「人間科学研究交流会」報告

である。本発表ではメラネシア地域の人類学と生態学それぞれにおける、成長を切断する「ギャップ・空白」の概念に着目し、それをフィールドの事例と交差させることで、この問いを深めることとした。

調査地であるマライタ島は、南太平洋のソロモン諸島国にある全長200kmほどの細長い島であり、ほぼ全域が熱帯林に覆われている。1980年代初頭に慣習的保有地での商業的森林伐採が自由化されて以来、主要産業の1つはこの熱帯林資源を生かした原木輸出である。西ファタレカ地域でも1980年代に伐採が始まり、現在まで断続的に外国企業による操業が続いてきた。森林伐採は自然破壊やコミュニティ内部での軋轢などさまざまな問題をもたらす。だがマライタ島北部では20世紀後半から沿岸部の土地不足が深刻化しており、現地の土地所有集団の間では、内陸部の開拓のために伐採事業を利用する動きが広がっている。

熱帯林は高温湿潤な気候（月間降水量100mm以上）である熱帯地域に特有の植生である。特に年間を通じて渇水期がない地域に成り立つ熱帯低地常緑雨林では、樹高数十メートルの常緑樹が密生し、その下に陰樹、地表植生が続く複層的な生態系を持つ。

極相状態に達した生態系が更新されるメカニズムとして注目されてきたのが、災害や樹木の自倒によるギャップの創出である。現実の森林ではさまざまな外的要因により大小さまざまなギャップが創出されるため、1つの生態系は異なる成長サイクルの土地をパッチ状に内包することになる。ギャップと林冠では環境が大きく異なり、それぞれの環境に適応した植物種——ギャップ創出後の直射日光下で発芽する先駆樹種と、林冠の被陰環境で発芽する極相樹種——が存在する。

西ファタレカの人々は日常の生業活動を通じて、こうした熱帯雨林環境の特性に関する科学的にも正確な知識を持つ。伝統的な生業である焼畑農耕は、人為的なギャップの創出により作物が育つのに必要な直射日光を確保する。

現在の森林伐採事業も、ある意味では巨大な焼畑の創出として見ることができる。人々が森林伐採事業に対して寄せる「新たな生業空間の創出」という期待も、一面でこうした伝統的な自然との関わりの上に成り立つものである。他方、伝統的な焼畑の場合、あくまで熱帯林の一部としてギャップが成立する。だが後者では、1つの山全体が伐り尽くされるように、ギャップと森林の関係は逆転している。そして、このような大規模な環境の変動は、それと向き合う人々のうちに別種の〈自然〉を経験させている。

ここで考えたいのは、そもそも現地の人々にとって「木々

が茂っている」景観はどういう意味を持つのかということである。西ファタレカ諸クランに伝わる神話では、クランの分裂と拡大の過程が、元の集団を何らかの事情で離れた男性が新たな場所で男性小屋（*beu*）を「切り開く／建てる（*kasia*）」ことの連続として語られる。そして、その創設者の死とともに男性小屋は墓地・祭祀地（*beu aabu*）となり、子孫たちが祖先に供儀を捧げた。

ところが人々がキリスト教に改宗すると、祖先が築いたこれらの祭祀地は、いかなる人も立ち入りできない禁忌の場所と見なされるようになる。ある土地で人口の増加が進むと、畑や集落が広がる一面の開けた景観の中に森が部分的に残る景観が出現するが、これは過去の人々が築いた祭祀地である。つまり開発は土地を自然から文化へと変換するだけでなく、その中に「問題のある土地」を切り出すのである。

森林伐採事業が引き起こす土地争いは、さらに巨大な「問題のある土地」を出現させる。たとえばその系譜の中で幾度となく父系祖先を共有する親族同士の憎悪（*susubulae*）や殺し合い（*sauwanelae*）が起こってきたと言われるあるクランの森林伐採事業では、数十世代前に内紛で殺し尽くされたと言われる集団の土地の所有の帰属をめぐる争いが生じ、結局周囲の山の木々が次々と切られていくなか、長さ3kmほどの尾根全体が手付かずのままで残ってしまった。このクランの人々にとって、成長が止まった極相林とは無知で不道德な祖先を体現するものに他ならず、森林伐採事業はこうした過去の闇をカネに換え、新たな生活を可能にするものとして理解されていた。ただし、どんなに自分たちが発展しようとも、過去の闇は留まり続ける。それを体現するのが「残ってしまった森」である。

最後にここまでの事例をもとに、先行研究が提示してきた、メラネシアの社会と自然とともに「成長」というモメントから見る観点を再検討した。西ファタレカの人々にとっての土地は、ギャップの創出に見られるように、一面では自己の成長と密接に結びついたポジティブな力として知覚されている。

ただし、その土地は「何十世代も前の殺し合い」の記憶と結びついた山のように、本当のところ何があるか分からない／どうなるか分からない他者性を秘めている。開発を推進する人々は、その行為の意図せざる結果、あるいは無意識のレベルにおいて、こうした土地の不確定性に関わっている。前者が言わば「生命としての土地」であるならば、後者は（S・フロイトの「死への欲動」に倣って）「死としての土地」と呼ぶべきであろう。